親の先行が子供の意志を力づけて、遂に子供をして善事を決行せしむるに至るのであります。

親は子供に對して「斯うせよ」「あゝせよ」と命ずる前に、又「斯うするものぞ！」「あゝするものぞ！」と說明し解釋する前にその所信を自ら斷行し、熱情を以て共同すべきやう模範を示すことが大切であります。……この意味に於て私は「對子供」の教育事業が今日の問題ではなく、兩親の家庭改造、生活改善、宗教信奉の問題が今日の問題であると信ずるのであります。

私は前に「二重相の子供」に就て申しあげましたが、少年と青年とは必ず時代思想の影響を受けずにはゐられないのであります。故に時代思想が惡化する際には必ず多くの親泣かせの子供が出來て參ります。けれども幼少の時代より母の膝の上の生活が愛と義とに馴染み込んでゐる時、その子供は必ず「時代相」を征服して「家庭相」に力强く生きて行くことが出來るのであります。

もしこれが眞理であるとしますならば「家庭相」を養ふ折は生後六ケ年間しか無いと云つて差支へないのであります。何故かなれば七年後は子供の生活の中心が社會並に學校に轉向して行くわけで、全く家庭中心の生活をするのは滿六年までであるからであります。……されば兩親はその子女を社會惡より救ふために何時「家庭相」の力强き教養をしようとなさるのでありませうか。母の膝の上に抱き得る時期以外には求められないではありませんか？

即ち出生後六ケ年の母の膝の上の教養こそ、その子女の一生涯を支配するのであります。そして母親並に父親の家庭生活の內容が子女の精神生活の內容を充實して行くのであります。……されば家庭を祭壇とすることの必要は言はずもがなであり、且つ母親の權威を確保するために、日々神を目當てに向上發展する實際の生活を明示すべきであります。今は母親の自覺して立つべき時ではありませんか！

宗教的社會教育

なほ七歲以後は主として子女の生活が、學校生活並に社會生活を中心とするやうになるのでありますが、學校生活並に社會生活が今迄母の膝の上で教養されて來た事と全く反對する場合が多いのであります。例へば神秘性が豐かに育ちつゝありしものを科學萬能で打ちこはし、感謝性と信賴性とが美しく發達しつゝありしものを批判性と獨自性とで踏みにじり、利己一點張りの心を增長させ天上天下唯我獨尊の態度をまで造つて傲慢不遜の人とする事もあれば、學習生活に飽き疲れて惱み悶ゆる落伍者も出來、或は又自由を失へる馬車馬の如く學科の重荷を默々と不愉快さうに曳きゆく機械化した者も生ずるのであります。

又社會生活のみに進出する子女は、親よりも却て仲間の生活を尊しとし、親に逆つても仲間の歓心を買ふ事に努め、これがために何時の間にか肉慾主義と左傾思想とに感化されて行く事が甚だ多いのであります。……なほ英雄崇拜の心に燃えゆくため時代の尖端をきる事が英雄の如くに考へられ、新奇を追ひ求め、奇抜を得意とし、遂に脱線の生活に陥つて眞面目なることが少しも出來ぬやうに成り果つるのであります。

斯くの如く七歳以後少年期より青年期を通じて、家庭の宗教的教養と正反對に進みゆく時は、甚だ悲しむべき結果となることは現代の世相が明かにこれを示してゐるのでありますが、然らばこれを如何に指導すべきでありませうか？　私は矢張り三十年間の體驗を以て次の如く確答することが出來るのであります。

即ち「日曜學校」と「教會生活」の訓練を以てこれを善導することで、彼等に「良き仲間」と「良き性情」とを與ふる事であります。而して兩親もその共鳴者となり、共働者となることに依つて幼年期の尊き教養を、少年期より更に青年期にまで生かさしむるのであります。

更に換言すれば「一家を擧げて宗教的に前進すること」でありまして、親も子も各自の所屬に義務を有し責任を感ずることが大切であります。……斯くして內は家庭に、外は教會に「愛と義と聖」との教養を一貫し得て、神を目がけ無限の向上の飛躍へと乘り出すのであります。元來人間は本然として神に向つて向上したき意志が旺盛なのであります。

良き性情の涵養

積極的善行の泉

何と云つても『良き性情の涵養』と云ふことが人間教育の根本義であります。良き性情をさへ持つて居れば、その人は必ず幸福な生活が出來るばかりでなく、すべての點が向上して參ります。例へば智能にしても意志が弱く、心がこもらず、不眞面目であつては決して進歩するものではありません。玉磨かざれば光なしで、先天的素質がどんなに良くても、學業に忠實でなく、それを樂しむ心が無かつたら瓦石も同樣に終つてしまひます。

忠實で善意に富んだ人は、その人の持つてゐる力の最高能率を上げ得ます。また感謝心に滿ちた人は喜んで困難にも打ち當つて參りますから挫折いたしません。更に敬虔と信仰の念に滿されてゐる人は獨自を愼みますからその仕事ぶりに蔭日向がなく、どんな場合にも最善を盡します。即ちすべての積極的善行は良き性情から湧き出づるのであります。

すべてのことに對して發動的で、すべての物に思ひやりをかけて、その上相手に働きかけて行く

動機が純潔であれば、もうその人は第一歩から最善をつくします。ですからその人の持つてゐる能力の最高能率を上げて行く事も確かなことであります。もしそれで失敗したとしても決して悔ゆる所はありません。……實際世の中にはこんな人間が必要なのではありますまいか。即ち最善の努力を拂ふ人、換言すれば本氣で一生懸命にする人物が必要ではありますまいか。

今日の教育は隨分「智能」の開發に重きを置きますが、その根本である學習に對する「態度」を能くせずに、それで効果を收めることは決して出來るものではありません。事物に對する態度と、それを理解する能力とは根幹と枝葉との關係のやうなものであります。

例へどんなに優れた素質を持つてゐる人でも、事物に對する心的態度が惡ければ、智能は決して活躍するものではありません。今日の教育の缺陷は、枝葉の問題である智能のことにのみ心あせつて、その發達を無理に促進させようと骨折り、子供たちはそれがために受身で注入されてばかりゐると云ふ狀態にあることであります。即ち突支棒式の教育でなければ通れぬやうに成り果ててゐることであります。

何よりもまづ「態度」を良くすることが先決問題でありまして、子供が自發的に、正しく働きかけて行くやうに導くことが教養者の最も注意すべき點であります。……然らばその良き態度を養ふ

にはどうすればよいでありませうか？　私は先に「すべての積極的善行は、良き性情から湧き出づる」と一言いたしましたが、矢張り私は玆に於てもそれを繰返したいと思ひます。即ち『良き性情の涵養』と云ふことが、すべての積極的發動の基本となるのであります。

宗教性の教養

さて玆に人間の宗教性を育てることに依つて、どんな性情が生ずるかを今少しく注意して頂きませう。

一、宗教性の第一は「神秘性」でありますが、これを良く養成しますと必ず「敬虔」な態度が生ずるのであります。この敬虔の心こそ神を崇め、神の聖旨に服從する志を强むるもので「至誠」の美德もここから湧いて參ります。……明治天皇の御製である『目に見えぬ神の心に通ふこそ人の心のまことなりけれ』といふ御歌は、實によく此の意味を示して居ります。

なほ神に對する敬虔の心は、ひいては聖人の德を慕ひ、偉人の業に憧れ、法律を尊び、權威に從ふ心を堅くし、己が心の賤しきを知り、謙遜になつて罪を悔い、又尊き理想を見失はずして大に奮起し、その人物奥ゆかしく、高潔に、謙遜になるのであります。……更に又項目を擧げて云へば畏敬、渴仰、服從、尊敬、信賴、愛、懺悔などの美德を生ずるのであります。

二、宗教性の第二は「信賴性」でありますが、神に對する絶對の信賴心が「信仰」と「忠節」とをその人の心に深く生みつけるのであります。殊に忠節心は神の恩寵に感激するところから起るもので、神の聖示を重んじ、それに服從することを喜び、積極的に奉仕せねばやまざるもので、その態度勇敢であります。なほ神に對して忠節なるものは眞理に對して忠實であり、己が良心に對して忠實であります。……從つて國家に對し、社會に對し、家庭に對し、己が職業に對し、己が義務及び責任に對して忠實でありまして、一つとして曖昧、虛僞、割引、よい加減を許さないのであります。

忠實なる人……その人は何と云ふ幸福な人でありませう。その人は例へ先天的素質が平凡であつても、その忠實なる事に依つて大成いたします。『石の上にも三年』と孜々として努力する人にこそ最後の榮冠は與へられます。猿智慧で小才覺な人物の多い世に、牛の歩みでも眞劍で忠實でその本分を守る人は必ず勝ちを占めるのであります。

忠實なる人は一見馬鹿正直に見え、融通がきかぬやうに見えますが、それは最初の印象だけで、時日を經過するに從つて信賴を受け、尊敬を拂はるゝに至ります。又忠實なる人は受動的で保守で

退嬰的に見えますが、その實意志が强く、むしろ精神活動は發動的であります。

次に「信仰」の結ぶ實を見ますならば、如何なることを爲すにも確信を以て臨み、遙かなる將來に希望をかけ、周圍の誘惑を退け、確固不拔の信念に依つて大膽に志を遂げてゆくのであります。なほその心中常に平和と自由と喜悅とを感じ、世に對し人に對して懇切を極め、その態度が常に公平であります。又その志つねに崇高なるものを渴仰し、絶えざる向上心に燃えて邁進いたします。

三、宗教性の第三は「感謝性」でありますが、此の感謝性から生れる美德として「お禮心（即ち感謝）」と「善意」との二つが擧げられます。

感謝の心……は實に麗しいものでありまして、この感謝心から萬物すべてが尊く見え何一つとして咀ふべきものなく、世の中はすべて祝福の世界と變化してしまひます。雨が降れば喜び、風が吹けば感謝し、露の玉が葉末に宿るを見ても歌心が生れ、小さき蟲の一匹にも挨拶したくなり、空ゆく鳥にも呼びかけたい心地がするのであります。……即ちその心の中に喜悅が滿ち、柔和、服從、報恩、の美德が盛んに湧き起るのであります。又事物に對して懇切な態度を示し、思ひやりをかけ共鳴を感じ、何時か相手を深く理解して己を相手のうちに生かすのであります。

次に善意……はやさしく思ひやり深く、親切な態度として表はれるばかりでなく、善を行ふに臆せざる至誠も勇氣もそこから生れ出るのであります。なほ神に對する善意は人に對しても亦同樣で社會の環境の一切に對して同情と懇切とを盡すやうになり、常に愉快なる氣持を有し、助力的行爲にいそしみ、禮儀を守り、人を尊敬し、人の罪をも赦し得る寬容な精神ともなつて表はれるのであります。

「感謝」と云ひ「善意」と云ひ、これ程尊くも亦美しい物はありません。これを一言で言ひ表はしますならば、「親心」であります。國に對し、世の中に對し、友に對し、また學業に對し、その他すべてのお仕事に對して親心を持つて臨んで御覽なさい。やむにやまれぬ愛心から積極的に祝福するために熱心にならずにゐられないでありませう。かくてその人は喜んで犧牲と奉仕の生涯を送るのであります。

尊き哉靈育

以上述べましたやうに、人間の本然に持つてゐる宗教性（神秘性、信賴性、感謝性）を養ふことに依つて（一）敬虔、（二）信仰、（三）感謝、（四）忠節、（五）善意、の美德が生れるとするならば良き性情を養成するに「宗教々育」を主眼とすることは、極めて當然なことと云ふべきではありま

せんか？　即ち靈育（宗教々育）こそ人間の性情を良くし、內面より發動し出す力を養ふもので、この基礎工事が出來て初めて智育、德育、體育などの美しい建築がその上に建設せらるゝのであります。……人間教育の根本である「性情の聖化」を忘れて、その枝葉の問題たる一般的な教育の問題を論じても、それはむしろ無駄であります。例へば修身書に依つて如何に德目が數多く羅列され、たとしても、それで子供たちの德性を涵養することは出來ないのであります。それよりも先づ靈育による「良き性情の涵養」が先決問題であります。

宗教々育の要領

天地萬物に對して心から興味を感じ、思ひやりをかけて、深くそれを理解して行かうとする積極的態度は、その人の持つてゐる性情から湧き出づるものであつて、外部からの奬勵や、指導だけで生れるものでないことは既に申述べた通りであります。

そして良き性情の涵養が先決問題であり、且つその涵養法は宗教性の耕作、即ち宗教々育に依ることが唯一の道であることをも申し述べました。――これをもつと分り易く申しますと『宗教々育に依つて良き性情が養はれ、良き性情が養はれると天地萬物の一切に愛と感激とをもつて、働きかけて行く生活態度が出來る』と云ふことになるのであります。

そこで今回は實際問題として『宗教々育による良き性情の養ひ方』に就てその要領を申述べたいと存じます。

宗教々育の時期

まづ第一に考へねばならぬことは「宗教々育をなすべき時期」であります。これはすべての心理

學者が所論を等しうしてゐる點でありまして、即ち發育時期に特定されてゐると申しても差支へありません。中にも十五歳を中心として、その前後に全力を注がねばならぬことは「回心期」即ち信念の確立期が恰度その頃が絶頂點にあるからであります。

私は過去十數年間に渉つて、日本の基督教徒一千二百餘名に就て宗教心の發達を調査研究いたしましたが、その結果によりますと、七歳から十四歳位までに自意識から神を確實に認め、十三歳から十九歳までの間に信念が確立し、十五歳から廿三歳までに洗禮を受けて信徒となつてゐる……と云ふ狀況でありまして、特に絶頂點とも申すべき最多數の年齢を調べて見ますと、神の確認は十歳が最も多く、信念の確立は十五歳で、洗禮を受けた年齢の最多數は十九歳となつてゐるのであります。——(これはスターバックの調査やその他の宗教心理學者の調査と殆んど同樣で、世界人類共通と云ふべきであります)

このやうに信念の發達する狀況は日本だけでなく世界人類共通して發育時期中——特に一人前の男女になる十五、六歳が最も重要な時期であることが分るのであります。されば此の時期を人生の峠と稱ふるわけで、生涯の方向を決定する分水嶺、即ち善か惡か聖か穢か何れかに突進して行く大事の瀬戸際であります。

然し、玆に注意すべきことは、なる程信念の確立期、善惡の分水嶺は十五六歳でありますが、それは幼少の時から教養されし結果と、特にこの時期に出現する本能とが原因となつてゐるのでありまして、前からの教養なしに突如として現れた現象でないと云ふことであります。

即ち信念の發達と精神の發達とは別種のものでなく、何れも發生的なもので順序を追うて段々に發達するものであることを證するのであります。……故に信念の教養も精神發達の道筋に從つて幼少の時から連續的に教養すべき筈のもので、十四五歳になつてから俄かに騒ぎ立ててもそれは既に手遲れであると考へねばなりません。由來人の精神と云ふものは一朝一夕に出來上るものでなく、赤ん坊時代から潜在意識の中に徐々に養はれて發達するもので、教養訓練も赤ん坊時代から始めねばならぬことは無論であります、——けれどもその内でも特別に大切な時期、即ち好機逸すべからざる時期がありますが、それは宗教々育に於ては第一が幼年期で、第二が前に述べた回心期即ち青年初期の頃であります。

幼年期が何故そんなに大切な時期であるかを説明いたしますならば、昔から三つ子の魂百までと稱へられて居ります通り、幼年期に教へられた事が一生涯を支配し、幼年期に躾けられた事が生涯變らざる性格の基礎となるからであります。

これを今少し精しく申しますと（一）幼年期に初めて先天的要素である氣質が現れ初めますから、個性上の善き躾けは此の時期を逸してはならないのであります。（二）獨自の意識も初めて幼年期から明白になりますので、その人の持ち味、特徴は此の時期の躾け次第で善くも惡くもなるのであります。（三）生涯記憶（一生涯忘れぬ記憶）は幼年期から初めて生れます故、此の頃深く感じたお話や、興味を引いたお話などが、生涯の感化力となるのであります。

要するに幼年期は潜在意識の中に一番深く刻み込まれる時であり、且つ一生涯つゞいて行く性格の基礎をつくる時でありますから、滿六年頃までにその人の人格は大體に於て決定するものと見ても差支へないのであります。

こんな風に幼年期までの教養は一生涯の基礎工事と見るべきものでありますが、特に宗教々育に於ては……此の幼年期に宗教性が著しく發現いたしますので、之を教養することに依つて青年期に於ける「確信」が刈りとられるのであります。以下それに就て今少しく精しく申上げませう。

即ち『幼年期に於て宗教性（神秘心と感謝心と信頼心の三つ）を養ふ事に依つて青年期に「敬虔」と「信仰」と「感謝」と「忠節」と「善意」の美德を刈り取ることが出來る』のでありまして、もしも幼年期に於て宗教性の耕作と云ふ基礎工事をしないと青年期に於てそれらの美德は刈り取れないばかりか、却て反對に脫線してしまふのであります。

宗教性の第一である「神秘性」を幼年期に於て養ひませんと少年期に至つて必ず科學萬能となり主知主義となつて神秘心は枯れてしまひ、第二の「感謝心」も同樣に批判心に變じ、第三の「信頼心」も獨自一點張りに變り、何から何まで科學的批評を加へて傲慢不遜な態度をとり、且つ我慢勝手を貫きたがり、親を馬鹿にして喜ぶやうになつてしまひます。

更に青年期に進みますと、どんな權威に對しても服從することがいやになり、人道をも、眞理をも、法律をも無視して遂には左傾思想へ突進し、或は又事志と違ふ時は自暴自棄に陷り、人を呪ひ世を恨み、何物をも破壞し盡さねば止まぬ如き荒みきつた人物と成り、更に全く方向違ひに肉慾主義に墮落して手のつけられぬ人物となつてしまふ者も多いのであります。

こんなわけで、どうしても幼年期に宗教性を養ふことが必要で、それさへ充分に手が屆いてゐますと、少年期の生意氣ざかりも、青年期の脫線的傾向もなくなり、敬虔、信仰、感謝、忠節、善意の美德が次第に養はれるのでありまして、その品性は漸次に高く潔く成就されるのであります。

以上のやうに「宗教々育の時期」は幼年期即ち母の膝の上の時代が基礎をつくる大事な時期で、續いて少年期に於て科學的批判や獨自性を極端に行き過ぎぬやうに注意し、更に青年期に至つて最

後の確立――仕上げをなさしむるやうに「幼年期より青年期まで」を目當てとせねばならぬのであります。

宗教々育の內容

第二に考へねばならぬことは「宗教々育の內容」の問題でありますが、これは禮拜の對象（即ち拜む目あてとなる神）が人格的完全者であるべきことが最も重要なことで、それから教理や形式を宗教心理の發達に適應させて行くことが大切であります。

昔から鰯の頭も信心から……と云はれてゐますが、これは宗教々育の內容として全く無價値なもので、宗教心理の發達に少しも順應しないばかりか、非人格的な對象を崇拜することはむしろ有害であります。又自然物崇拜も、人物崇拜も、偶像崇拜も前述の二條件に叶はないことは無論でありまして、決して價値あるものではありません。

元來人類の宗教心の發達と、一個人の宗教心理の發達とは同じ道筋を通るべきものと認められてゐますが、それに依つて見ますと、まづ自然物崇拜から出發して、偶像崇拜、英雄崇拜、祖先崇拜、聖人崇拜と進歩し、それより愈々道德的に醒むる事に依つて義なる神を認むるに至り、更にそれが赦しの神即ち愛の神となり、それより遂に人格的な神となつて終つてゐるのであります。

なほ人格的の神と云ふことに今少し說明を加ふれば、活ける靈なる神であつて、我等に共感し、助け勵まし、敎へ導き給ふ生命の源なる神なのであります。……されば此の標準から見て私は最も優越せる宗教は基督教であり、この宗教の有する內容こそ宗教々育の唯一の教材でなければならぬと主張することを躊躇いたしません。

基督教に於ては、その崇拜の對象なる神を普通『父なる神』と呼んでゐますが、これは人格的完全の神と云ふ思想を云ひ表はすに最も相應しい言でありまして、其の父なる神に對する態度から「敬虔」「信仰」「感謝」「忠節」「善意」等の美しい性情が湧き起るのであります。でありますから幼少の折から父なる神に對する「心の持ち方」即ち心的態度を教養訓練することが宗教々育に於ける最も良い方法であります。

又父なる神と申しますと幼兒にもよく理解出來るのでありまして、その守護と愛とを直ぐ追想して感謝心も信賴心も起り、更に聖く尊き天の父なる神と云ふ觀念から神秘心も豐かに湧き出て來るのでありまして、幼兒はその人格的な神の感化を受けつゝ善き性情に生ひ立つのであります。

今度は父なる神を信ずる心から（信仰に立脚して）天地萬物を見、或は古今の英雄や聖人たちの

事を考へて御覽なさい。父なる神を信ぜぬ不信仰の立場から見る考へ方とは全く違ふ筈であります即ち父なる神を信ずる心から見れば「攝理」「恩寵」「祝福」「榮光」「權威」などが充ち溢れてゐる事を覺る筈で、從つて子供たちの人生觀も世界觀も愛と希望と信仰とに根ざし、その生活までが眞と善と美とを發揮するに至ることは當然であります。

以上の如く宗教々育の內容に關する問題は、どんな宗教でも好いと云ふわけではなく、必ず禮拜の對象たる神が『人格的完全者』であるべきことが第一條件で、次は宗教心理の發達に適應した最も優越した宗教——特に堅實な人生觀、世界觀を與へる宗教でなければならぬことが大切な條件であります。

宗教々育の機關

第三に考へねばならぬことは『宗教々育の機關』即ち場所、施設、方法、などの問題でありますが、その第一に擧げねばならぬことは『家庭の祭壇』であります。よく私共は『自分は無宗教であり、且つ多くの惡い癖を持つてゐるが、子供だけは早くから宗教々育をして、少しも惡い習慣に染ませずに育てたいものである』と仰せられる父親や母親に遭遇いたしますが、これは全く本末を誤つた考へ方であります。

家庭に不純なものがあれば、それが子供の思想と生活とに影響しない筈はありません。兩親の虛僞な生活、不純な願望ほど子供の心を毒するものはありません。家庭が祭壇となつて神を禮拜し、父母は祭司の立場になつて神と子供との仲保者となる時にこそ純潔な子供も良き性情の子供も育つのであります。

兩親は、宗教々育の問題を子供にのみ必要としないで、まづ自分たちに必要とせねばなりません。何故かなれば子供はすべてを模倣し、親の行動の通りに行動するからであります。即ち兩親の正しき信仰生活こそ子供を正しく教養する唯一の方法であります。教育は教育者自身が眞實に生活する事であつて、教育者自身の精進なしに被教育者を大成せしむることは出來ません。

又眞實に子供を愛し、眞實に子供の大成を祈る親ならば、到底神なしにはゐられない筈であります。至誠は遂に神に向つて叫びます。……まづ家庭が祭壇となり、そこにて兩親の誠實な祈りが行はるゝ時、子供の心は力强く神へと飛躍するのであります。わけても母の膝の上の祈りを聽くことほど子供の心に活力を與へるものはありません。母の感化力の力强さと尊さとがよく玆に表はれてゐるのであります。

宗教々育の第二の大切な機關は「日曜學校」であります。この日曜學校の施設に就ては他日稿を改めて、精細に述べたい希望でありますが、子供の社會生活を宗教的にするために唯一の尊い役目を果すのが日曜學校であることを知つて頂きたいのであります。

如何に家庭の祭壇が整つてゐても、社會的環境が惡いために惡感化を受けて子供の品性が損はれることは、その實例が甚だ多いのであります。でありますから子供の品性を損はずに育てるためには、家庭を祭壇にするばかりでなく、遊び仲間を聖く正しくする機關がなくてはなりません。

更に又子供は家庭の一員として成長するのみでなく社會の一員として成長するのでありますから正しい社會生活の訓練を受けねばなりません。その意味に於ても、勇氣、正義、忠節、奉仕、協力、服從、などの源泉である宗教々育が如何に必要かを御認めになりませう！　實に日曜學校の施設は家庭の祭壇と共に車の兩輪たる立場にあつて子供の品性を正しく育てるのであります。

不許複製

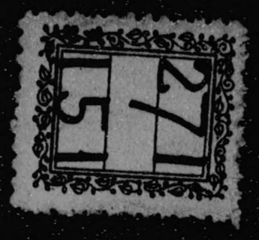
7.20

昭和九年七月二十日印刷
昭和九年七月二十五日發行

「親心のゆくへ」
定價　金五拾錢

著作兼發行人　東京市杉並區阿佐ケ谷五ノ三〇　高崎能樹
印刷人　東京市京橋區湊町三ノ二　木藤彦三郎

發行所　東京市杉並區阿佐ケ谷五ノ三〇
宗教々育圖書刊行會
振替口座東京五六五七四番


1½
2½